桂園竹譜 三

○むちく竹 一名磨竹 一名筇竹 ○寒竹 一名雪竹
○ころ竹 一名黒竹 又烏竹 ○琉璃竹 一名苦蘿竹 ○黄金竹 一名黄金
○金明竹 一名黄金間碧玉 ○銀明竹 ○碧玉間黄金竹
○まだけ 一名金絲竹 ○瑠璃竹 ○慶竹
竹 一名道竹 ○五寿竹 一名相思竹
多般竹 ○仏面竹

内閣文庫
和書
門 類 號 冊 架 函
二一二 五 五 二 九七

内閣文庫
番號 和 11115
冊數 5 (3)
函號 197 61

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
国立公文書館 National Archives of Japan

桂園竹譜巻之三

むらさき竹　胡麻竹

むらさき竹ハ今いふ紫竹にて即和漢通名なりその一名を紫君一名紫苦一名観音竹といふ此種ははじめ籜はなく時あるを青く漸くにして紫に變ずるものなり筍いでて即紫なるものハ毛のま（竹譜詳録 江陰縣志）まこ一年ハ青くして二年めに至りて紫に變じ（新安志事 物紺珠）或ハ二年にして色は變じ三年にして紫なるもあり（益部方物畧記）今あるものハその幹濃紫にして高さ八九尺徑四五分にて雙枝のもの多く獨枝のもの少なし葉ハ細小にして大抵淡竹の如し李息齋竹譜に紫竹今處々にあり笙竹の如く淡竹の如く苦竹の如しといへる中に淡竹の如くといへる

又即これと同種なるへしいふものあり淡竹も毎枝細小にして
篙となすへきにしもその也紫竹の枝もまたこれとおなしく篙
に作るへし然るに苦竹筆竹の如しといへるものまた和産いま
た詳ならすまた俗に胡麻竹といへるハ紫黒色の斑點ありて
て別種のやうに見ゆれともその實ハ紫竹の年を経て再ひそ
の色を變せしなり 今隅田川木母寺のうしろ及ひ摸木
戸また河口邉此竹殊に多し 又京都将軍家の跡も紫竹に
て作れる鞭を平人ハもちゐさると 弓馬故實 いへり西土にても馬箠に用
ゆるよし 竹譜詳録 また此竹を傘柄その外杖なとに用ゆるこ
と西土にてもあるなり一種舶来のものありその高さ大抵
七八尺根上より四五節の間ハ双枝にしてそれより以上は

三枝なりその三枝の状左右の枝ハ大にして中枝ハ至て細し
またその色ハ上節より染出して下節のゝちにいたれハ節まて
紫色にして枝にも紫斑あり葉ハ前條よりハ細小にて二葉
三葉を一朶とし葉本に細褐毛あり此種ハ今白河侯大塚の
下邸にあり凡笙竹ハ淡竹なれともその葉やゝ細小なるものなれ
は竹譜に紫竹笙竹のたくひといへるも蓋しこれらをさし
ていひしなるへし 又越後國の方言にさゝき竹といふもの有
即其國七不思議の一ッなりされも親鸞上人の紫竹の杖をさ
し置れしか根つきて遂に竹林となりしと 和漢三才圖會 いへり西土
にても越州蕭山縣の東に黄竹山有り其上に黄竹多しこれハ范
蠡の鞭をのこし置しかやかて筍を生して林となりしよし

竹譜詳録いへると同日の談也
大和本草云和品紫竹色紫黒淡濃紫白相雑レリ
和漢三才圖會云紫竹本朝亦有數種云云紫竹筱竹多
有之
又云紫竹林在蒲原郡弥彦庄鳥屋野東派西方支配之親鸞聖人
三年居住弘法之地也而未皈伏者衆於是以所携紫竹
節揷曰我所勧念佛宗愜佛意則此竹當活生果不日繁
茂而枝葉猶倒生人無不感信其竹林南北三十五間東西二十間今亦存
在焉
本草綱目啓蒙云紫竹ハ即苦竹ノ品類ナリ生シタル年ハ緑色
ナリ翌年ヨリ變シ紫黒色トナル蘇頌ノ説ニ苦竹ニ有白有
紫ト云丹鉛録ニ又有苦竹黄苦青苦白苦紫苦ト云是ナリト
益部方物畧記云紫竹蜀諸山中尤多園池亦種為玩然
生二年色乃變三年而紫
竹譜詳録云紫竹出江浙両淮今處々有之如筀竹淡竹
苦竹或大或小但色有浅深通名紫竹有初緑而漸紫者
有筍出即紫者世共謂之紫竹用之織柄柱杖甚佳亦有
製簫笛者根亦紫色節々匀停於馬箠尤宜新安志云紫
竹斫之益繁諺云一年青二年紫三年不斫四年死
續竹譜云紫竹其莖如染出青城蛾眉山可作笙竽簫管
遵生八牋云紫竹杭産色紫黒可作笙簫笛管諸用俱可
故雅尚者多畜之

国立公文書館 National Archives of Japan

本草綱目云、紫者黯色黝然、

致富全書云、紫竹高可丈餘、大僅手握、相傳紹興中有商泛海阻風、上下、見一僧背後有竹、斬之作杖、隨以有光、倏忽即是落山觀音座後、旃檀林紫竹、又名觀音竹、可作簫笛、

通雅云、紫竹斑竹、皆有大者、又有極小、如瀟湘竹者廣四仙廻深山有之、

秘傳花鏡云、紫竹出南海普陀山、其幹細而色深紫、叚之可為簫管、今浙中皆有、

華夷花木考云、紫竹小而色紫、宜傘柄簫笛用、

江陰縣志云、紫竹初解籜猶青、久之色乃變、

陽春縣志云、紫竹莖細節密、不甚高、深紫色、植之庭際、可稱雅玩、堪為杖、亦可製簫、聲極清亮、

高要縣志云、紫竹稍類斑竹、而通身紫色、質堅重、堪作器、

番禺縣志云、紫竹幹如指、紫色、長不滿五六尺、

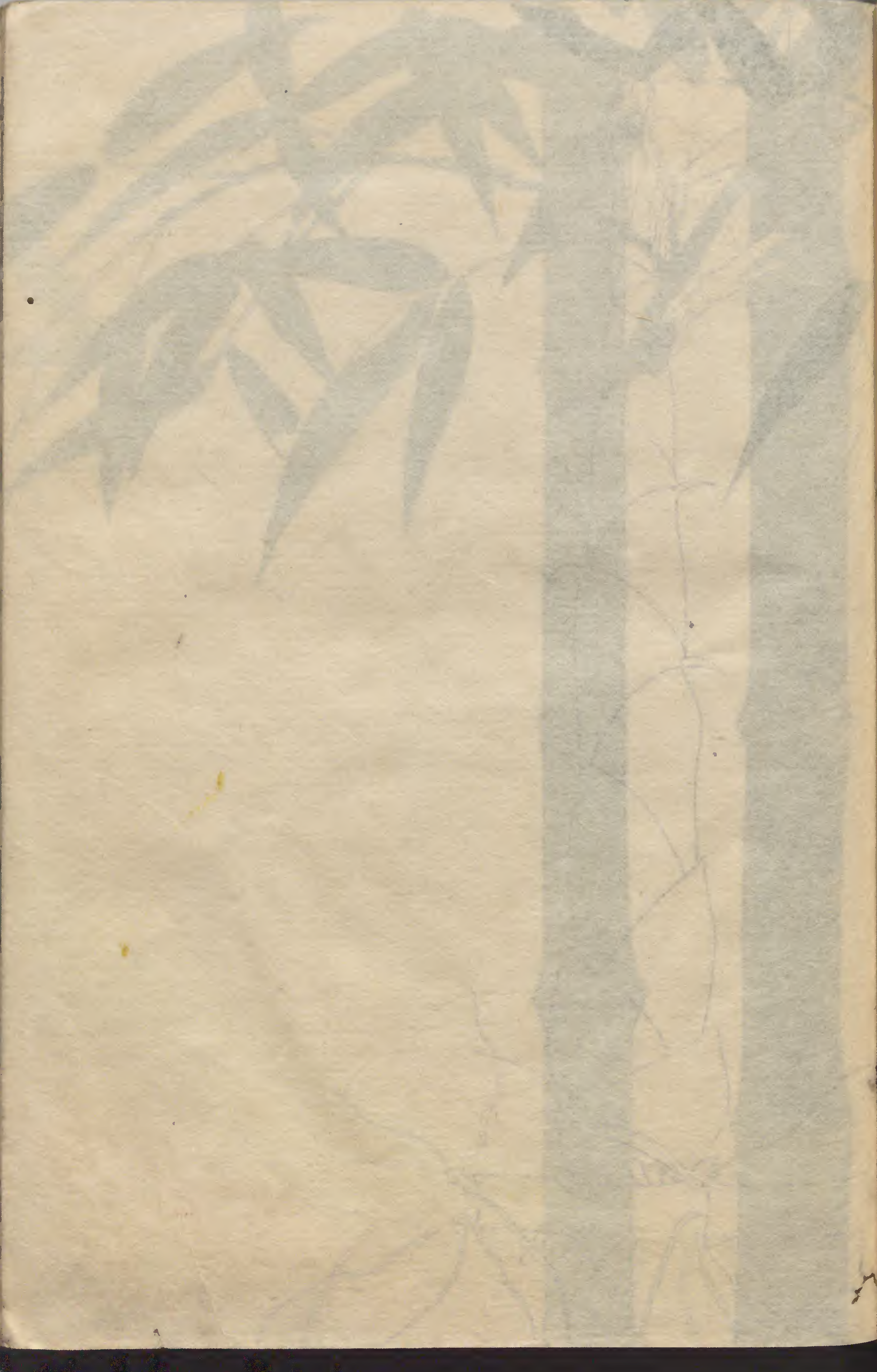
當塗縣志云、紫竹質堅、厚於斑竹、

建昌縣志云、紫竹生本土者、幹小而脆、惟紫黑色可供觀美、堪用者少、

仁和縣志云、紫竹小而色紫、可為簫管、其細者宜笙、

會稽縣志云、紫竹可為簫管、九節者佳、

邵武府志云、紫竹與斑竹相類、但其色純紫、可作傘柄、亦可作簫笛、



紹興府志云、紫竹可為籥管九節者佳、

江西通志云、紫竹小而勁直色紫、可備簫管、九節者佳、筍味亦美、

紹興府色以紫竹可爲簫管九節者佳
節而圓色不紫竹外而節直色紫可備簫管九節者佳
此亦充

釋名

むらさき竹　家隆卿百首　逍遥院家集

胡麻竹　俗称　此竹紫黒斑點極めて細小なれハ頗る胡麻の如し故に名づく

紫竹　益部方物畧記　竹譜詳録　本草綱目　致富全書　華夷花木考

紫君　廣物類纂引張文潜賛

紫苔　丹鉛録

觀音竹　事言要玄集　致富全書

正誤

壒嚢抄云世ニ紫竹ノ忌ハ堯ノ女娥皇女英崩御ノ後湘浦ノ南蒼梧野ニ納奉リケレハ二人ノ妃常ニ行湘浦ノ岸ニ立テ泣給ヘル涙竹ニ懸リテ斑ヲニ染リケル也後ニ生出タルモ湘浦ノ竹ハ皆斑ラナリトイヘリ此竹メツラシキ故ニ移シ植テ世ニ弘マレル也昔ナキ人ヲ戀涙染リシ故ニ此竹ヲ忌ナリ今紫竹斑竹トニツニイヘ共同類ナルヘシ　紫ハ紹武府志ニ紫竹與斑竹相類といひ高要縣志にも紫竹梢類斑竹而通身紫色なりといへるもその實ハ別種なり且紫竹ハ娥皇女英の涙かゝりし竹にもあらされハ斑竹をこそ忌とも紫竹は忌へきのいはれなしその二女の涙かゝりしといふもましてそ西土のふることき俗説にして斑竹の斑文何れも後に紫竹の紫色なるも皆其竹の天稟なりされハ涙かゝりし故ハ斑文の出来しといふも同類のものなるにして忌といふもとより拘まし又今の俗説に紫なる色のうつろひやすきものなりとて婚姻の衣服なとにはそのゑんと用ひさるなりなとくすり紫竹にも忌もありしくはその類ひにてもいかなる爲事さるにや

廣大和本草云紫竹云　云大和本草ニ彼ニナシト云ハ非也　紫は大和本草紫竹條の標注に和品の二字いれて彼になしといふ文をとゞめし然るを直海龍の漫にその文をけちて強て篤信をしりそけたるハいかゞ

寒竹　孟宗竹

寒竹一名孟宗竹ハ漢名をもて紫竹といふその性叢生

なりて數十百幹に至る故に人家多く分ち植て籬落
となす此竹徑り三四分にして高さ八九尺或ハ一丈許節極
めて繁し中幹より以上ハ大畧一尺の間五節ばかりにして
揃へり以下ハ四節なり凡諸竹ハ上節高く起りて下節
ハ低く上下相合して一節となるハその常なれども此本幹ハ
上節却りといへども至て低く籜を生ずる下節のことなるが如
く又枝節に至りてハそれと相反して上節却て高く起り
下節ハへこみたるさまこの如し　されば籜細斑紋ありて頗るま
竹の籜の斑紋に似たり故に此枝ハ根上より十三四節以上ハ
始めて双枝を生ずるなり凡二節にて夫より以上ハ毎節ごとに
て三枝あり凡竹の三枝なるハ左右の両枝ハ長大にして

中枝ハ却て細小なるものなれども此枝ハそれと相反して
中枝ハ長く左右の枝ハ短し其中枝の長きといへども僅に
一尺許に過ずその枝に大十二三節ありて毎節各両三枝を
そうち長さ三四寸廣さ四分許の細小葉を繁茂しいと多し
その枝を生せざるハ根上十三四節にもすべて小黄芽ありて
此芽年を経る時ハそのまゝ抽出てそのまゝ三枝を生ず
其比にも彼の二節の双枝なるも別に一小筍を生じて一枝
を添ふ也凡竹類多しといへども此竹より短枝密節繁
葉なるものなし但し本幹細小なる故を以て其稍抄に至
てハ枝葉下垂ること業平竹の如し按大和本草に寒
竹冬筍を生ずといへども今江都にあるものハ此筍秋より

生して冬に至りても生長し母竹よりも高し蓋風土の異なる
ところなるへし其筍の状は竹よりも甚た細小なり
といへとも味甘美殊に食ふに堪たり
大和本草云寒竹冬筍生ス又孟宗竹トモ云色黒ク細シ
本草一家言云有雪竹、和名寒竹、又名孟宗竹、冬時抽筍、
皮斑似護基竹、
増補地錦抄云寒竹も多黒くしなやき竹あり冬の中に
竹の子出る故寒竹と云又漢竹ハこゝになき物にや平経
盛ハ沙金百両にて宋朝へ渡し取寄て笛に作りけるとて
今いふ寒竹ならはさもなし 寒の中に筍の生する故
又孟宗竹ともいふ

本草綱目啓蒙云カンチクハ紫竹ナリ人家ニ栽テ籬トス小竹
ナリ高サ五六尺甚繁茂ス其成熟ノ者ハ黒色斑ヲナス大ナルモ
ノハ傘柄ニ用ユ
揚州府志云紫竹人家庭心多苞叢而生中實其色深紫
可愛、

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

釋名

寒竹 廣物類纂 大和本草 本草一家言 増補地錦抄 本草綱目啓蒙 孟宗竹 同上○以上名義上文にミえたり（また鳳尾竹の一名に孟宗竹といふ即同名異物なり） 紫竹 楊州府志

正誤

廣大和本草云江南竹和名カンチク汀州府志云江南竹寒中生筍名曰雪竹即チ此竹也然ルニ寒竹ヲ和品トスルハ誤ナリ

誤当作書

本草一家言云有雪竹、倭名寒竹、云々　案るに寒竹ハ即紫竹なり然るに此二誤あり、雪竹となしたるハ誤まり竹譜詳録に雪竹生江西、枝葉似筀竹、而稀疎、毎節長二尺許、其薄皮江蘆、差堅厚、筍色純白、故名、或云、孟宗冬月哭而生筍者即此竹也、張得之譜云、出清源、深冬生筍冒雪、一云即江南竹筍之早出者、といへりされはてかれ誤まりたる名としるへし又云江南竹江浙閩廣間、皆有之、大概與淡竹相同、但一面出三小枝、葉頗繁盛、安南生者、枝葉長大、筍亦可食、といへり、されは雪竹と江南竹とを以て一物となせるもまた誤まれり

くろちく

くろ竹も漢名は黒竹一名烏竹といふ即和漢通名なりまた一名を篤竹或も烏歩竹ともいふ此竹小野蘭山は播磨よありと本草綱目啓蒙にいひ谷川士清ハ薩摩よありと和訓栞にいひ佐藤成祐曰薩摩乃産をもれる竹雄竹よ似て幹極めて紫黒色なりといふは此種播磨よ産せるものと同種なるや否やしらすただ今白河侯大塚の下邸よあるもの高さおよそ七八尺枝葉並ひよ紫竹よ似てその色紫竹よりも極めて黒し此種も即漢産のものなり一種観音竹といふもの黒竹と名つけその幹細小よして長さ二丈八九尺状古藤の如し（瀛涯勝覧　彙苑詳注）また一種烏竹といふ多く筍をいふ名そ時よりの色黒し（竹譜詳録）また綵竹一名黒竹といふ（芳亭客話）とも小和産なるやいまた聞かす

本草綱目啓蒙云烏竹ハ黒竹ナリ本草彙言ニ黒竹長二尺許如指大、純黒色葉玄碧出西山下云南雲通志ニ黒竹色黒可為簫管ト云和産播州ニアリ

竹譜詳録云篤竹一如紫竹、但色正黒耳、

本草綱目云烏竹黒而害毋、
廣羣芳譜引雲南通志云黒竹出懐寧、色黒可為簫管、案
此與原譜黒竹異、案ズ原譜黒竹ハ蓋シ觀音竹といふなるへし
漳州府志云烏竹其色如漆、
寧波府志云烏竹其笋最佳、
邵武府志云烏歩竹大如斑竹、笋極佳、
瀛涯勝覧云觀音竹如藤、長丈八尺許、色如黒鐵、毎寸約
二三節、
彙苑詳注云觀音竹出占城、如藤長丈八尺許、色黒如鐵、
毎節二三寸、
湧幢小品云黒竹如藤長丈八尺、色黒如鐵、毎節長二三
寸、名觀音竹、産占城國、
竹譜詳録云烏竹生慶元等山中、大者五七寸圍、形状與
龍須竹大同、但筍出時烏紫色、日乾致遠味珍、他筍不可
及也、
芳亭客話云有絲竹、葉細而青、莖痩而紫、亦謂之黒竹、

東藪竹譜所載烏竹之圖

釋名

く謗竹 俗称 黒竹 雲南通志 烏竹 漳州府志 寧波府志 觀音竹 瀛海勝覧 彙苑詳注

絲竹 茅亭客話

正誤

庶物類纂云黒竹一名觀音竹、一名絲竹、案に觀音竹ハ長さ一丈餘にて其色黒きものゆゑに一名黒竹といへは其竹古城國に產するをもつて古城觀音竹ともいへりまた茅亭客話に有絲竹云云亦謂之黒竹といふ是即同名異物にて絲竹も必ス觀音竹にはあらずして然るを混じて一物とするも誤まり

本草綱目啓蒙云烏ハ黒竹なり本草彙言ニ黒竹長二尺許紫黒色出西山 案本草彙言に見ヘ文徴明太史墨竹銘又蘄水縣鳳捿山下有墨色小竹俗云王義之洗筆池崖畔出也の三十四けるされはよりて彙言にいへる所黒竹も墨竹の誤まりにて西山に出る所の七鳳捿山下にいづるもそのもてあつかひ大さハ大抵おなじきものなるへしそれを以て綱目の烏竹に混同せしハ誤りなり又庶物類纂に黒竹一名觀音竹の條に本草彙言を引しハ高さ僅に二尺許のものと長さ一丈七

八尺のものと相混同せり此外も彙言の黒竹も即墨竹の
あやまりなることを知るべからず何や決断なし

琅玕竹　紫籜竹

琅玕竹ハ漢名にて紫籜竹といふ其高さ二尺許葉ハ熊笹に似て細小にして長さハ九寸廣さ一寸餘其葉おほよそ七八葉にして一朶とし或は五葉六葉のものあるは必ず下葉より枯落せしにて全形にあらず是その葉面また熊笹の如く正中に淡黄色なる一縦道ありてその左右とのしハ線路相並びて共に葉本より葉先に至る此竹小なりといへども其節間獨枝を生じ及ひ籜おちざることさら熊笹の如し但毎節下紫黒色なるのみ異なりとす此竹今白河侯大塚の下邸にあり既に移し植しより十餘年を經るといへどもその時の儘にてさらに生長をすることなし

といへりされども此竹ハ大竹にハあらずして箬の類なること明らかなり

竹譜詳録云白籜竹在處有之莖小於箸葉如掌大而長、紫籜竹亦同、但莖色黒紫耳、紫和産紫籜竹とは葉細小なる所ハそれは風土のちがひしなる所にして別種にはあらじ

釋名

琅玕竹　種樹家称○案に此竹ハ莖色紫黒色にして斑文絶てなし然るを琅玕竹といへるは蓋し種樹家の強名なるべし

紫籜竹　竹譜詳録○撫州府志云箬竹又名籜竹

黄金竹

黄金竹は漢名にて金竹といふ此種江浙の間に生ずるものにて其状淡竹の如く竹譜詳録琉球薩摩等に産するものは苦竹

よ似て小なり（丹洲竹譜）また安房よりいだせるものは高さ二丈許
にて生竹の時ハさ迄して黄色ならざれといへども乾く時ハ其色
鮮黄頗る真金の如し（佐藤成裕説）又黄竹一名黄皮竹といふは
猶も金竹と同種なるべしとおもはるゝ竹譜詳録再
黄竹叢生與慈竹一類といひ晋安海物志に黄竹節紫色黄
とこゝろあるものも前條と同種なるもいふべきなり

丹洲竹譜云金竹狀似苦竹而小、其幹皆金黄色、琢地多
有之、

本草綱目啓蒙云汝南圃史ニ金竹幹色純黄似金ト云廣
東新語ニ有黄皮竹凡竹非青則緑此獨黄古詩云林中枝
枝金瑯玕一丈二尺拂雲端謂此ト云薩州ニ金竹アリ黄ニ
シテ青色ナシ節長二尺許笛ニ作ルベシ大竹モアリ

竹譜詳録云金竹生江浙閒、一如淡竹、高者不過一二丈、
其枝幹黄淨如真金、故金名、笠法真羅浮山疏曰、羅浮山
有竹、色如黄金、

又云黄竹叢生、與慈竹一類、但成竿即黄色、故名、越州蕭山
縣東三十里有黄竹山、上有林竹、色微黄、狀如刀削、志云
是范蠡遺鞭於此山生筍為林、即此竹也、晉安海物志云、
黄竹節紫而色黄筍可為俎、

本草綱目云、黄者如金、

蘄州府志云、呉郡志金竹不甚大、色如金、今不多見、

江南通志云、金色如蒸栗、

汀州府志云黄竹小而黄色、一名界金竹、其笋季夏方生」

邵武府志云黄竹幹可以釣、篾可以纜、其色黄、

八閩通志云黄竹小而黄色、

松溪縣志云黄竹小者、可為筆管、

鉛山縣志云黄竹節長肉簿、植之易成、

靖江縣志云黄竿色黄亦脩偉、

詩

江南通志

詠金竹　　蒋堂

百鍊先寒一徑深潜疑造化鑄成林貪夫或有凭欄者不見修篁但見金、

釋名

黄金竹 俗称金竹 竹譜詳録 蘄州府志 汝南圃史 江南通志 黄竹 竹譜詳録 安海物志 晋 邵武府志 八閩通志 以上三名和漢同意なり下の黄皮黄竿の二名も是に同し 案るに續竹譜に穆天子作詩三章以哀民謂之黄竹之歌とミえたれハそれ竹ハ今いふ黄竹なるか金竹なるか其實は定かならすといへとも いつれにても黄竹は古名なれハ金竹は後世の名なれハ古今の金竹をさして黄竹といひしもしるへし又古詩にいへる林中枝枝金琅玕といへるも是なるへし八閩通志に班桃枝竹一曰黒金竹又名黄竹といへるも同名異物なり

黄皮竹 廣東新語 黄竿 靖江縣志

正誤

事物紺珠云金竹節有金色、案るに金竹ハ通幹皆金色のものなれハ異苑詳注及ひ格致鏡原に金猫竹其節有金色とミえたれハ節のミ金色のものハ即金猫竹なる事明らけし さて事物紺珠にいへる金竹も蓋し金猫竹の猫字の落しなり然るを廣物類纂金竹にも係て紺珠を引しも脱文あるをしらさるの誤なり

竹譜詳録云金竹生江浙間、一如淡竹、案るに竹譜詳録黄金間碧玉竹條に

碧玉竹一與金竹同ときこゆ此文によれば碧玉竹も金竹も其形状一
様のものなるもきこゆるし海さ薩摩琉球及び安房等より産する金竹も今
称する碧玉竹と同しく若竹に似たるものなれど竹譜詳録にいへる
浙江間に生するものもそれと同し形状なるへきは同書に金竹一如
淡竹といへるも前後矛盾に似たりされとも葉の淡竹に似たるも
のあり蓋し風土の異なるによりての故なるにや うたかふへし
汀州府志云黄竹一名男金竹ハ葉ハ黄竹と通幹黄色のものな
れハ男金竹の名を命へたれ
然るに汀州府志よりその名を載せしハ黄金間碧玉竹も
まこ黄竹といへるによりて誤れるなるへし

金明竹　金竹

金明竹一名金竹一名筋竹一名志ほたけハ漢名ハ黄金
間碧玉竹一名金鑲碧嵌竹一名黄金間碧一名斑桃枝
竹一名對青竹一名青黄竹一名越閃竹一名男金竹一
名閃竹一名黄竹一名間竹といふ今本所押上邸の人家
に一叢林あり高さおほよそ一丈五六尺圍ミ二三寸其幹地上
より四五節をば経て始めて双枝或ハ獨枝を生じて其枝左右細
大なり異なる及び其節の隆起頗る苦竹と一様なりといへども枝
をば生ずる節より以上も凹處皆青色にして枝を生ぜざるの
も黄色なり されども黄色なる中にもまた青なる凹處をば少
しく離れて別に一行の深青細縦道あり其細縦道二行相
並ふものあり又青色やや薄し又下節の枝なくして正圓なる穴
も青黄色を互にまじへて頗る上幹の如くしその幹を二つに
したるも内白肉ハ外画の青黄に拘らずすべて淡青色を帯て常竹
の如く紙白なり 其葉もまた苦竹に相似たりといへども葉上に
細縦白道二三行雑出しまじへて青色なり されハ苦竹に異なり
此筍もまた苦竹と同しく五月の頃に生しその籜青黄紅緑

數縦道あり其形頗る刷絲の如くにして紫斑點あることあり
苦竹の如しその奇麗最竹幹よりも勝れり味は大抵苦竹
筍に相似て食ふべしまた幹葉ともにみな小にして毎節間三枝
を生ずるものありその左右の枝は大にして中枝に至て細小なり
惣て尋常の苦竹の多くは三枝を生ずるものあるに同じ別種に
てはなし又和漢三才圖會に銀明竹一名紗地竹ありその筍
色白して溝緑色といへり故に後世金明竹乃土地にまれて
その色を變ぜしものなるべし一種碧玉間黄金竹あり是は
惣て竹身緑色にして節間の凹處一道黄色なるものあれ
ど今甚稀なりといふ一種竹身半は青く半は紫にて二色相
映ずるものを舊は對青竹といへり僧賛寧の筍譜にこ

えたり本邦には絶て此種あることを聞かず

和漢三才圖會云一種有金明竹外黄溝中緑色
又云俗云銀明竹者筍色白帷溝中緑色其美也稿則緑
變一如尋常竹
大和本草云黄金碧ハ竹譜ニ出タリ黄竹ニシテ青筋アリ雄竹ナ
リ大名竹ニ似テ不同京都北野ノ草本屋ニモアリ
本草一家言云黄金間碧玉竹和名金竹又名筋竹其形
状出于五雜組雙槐齋抄呼為對青竹
增補地錦抄云金竹ふしきは竹は杖などあり竹皮の色黄
なりて三分程の青きすぢ溝のうちに一筋つゝあり筆
竹ともいひやう竹ともいふ

竹譜詳録云黄金間碧玉竹、一與金竹同、但枝節間凹處一道深緑、越産以是名者又異、

又云碧玉間黄金竹亦同上、但竿色全緑、枝節間凹處一道深黄、

學圃雜疏云金竹中美者、曰黄金間碧玉、色澤殊常、中界一道緑尤可愛、有一種大者、曰碧玉間黄金、稍不通然與黄金竹相對、廢一不可、余圃中俱不乏、

遵生八牋云黄金間碧玉竹杭産、竹身金黄、每節直嵌翠綠一條、不假人為、出自天巧也、

又云碧玉間黄金竹杭産、竹身全緑、每節直嵌金黄一條、亦天成也、

彙苑詳注云、碧玉竹黄金間碧玉竹、

湧幢小品云、成都有竹、青黄相間、謂之黄金間碧玉、

五雜組云、黄金間碧玉竹、其節一黄一碧、正直如界然、

致富全書云、黄金間碧玉幹青黄色間節、或一節半青半黄、

群芳譜云、黄金間碧玉産成都、青黄相間、

廣群芳譜云、黄金間碧玉成都古今記云、對青竹、竹黄而而溝青、每節若間出、浙中亦有之、會稽甚多、彼人呼黄金間碧玉、紫筍譜云、竹則一邊青一畔紫、其色又與此小異、

本草彙言云、對青竹黄而葉青、成都所出、今兩浙亦有之、惟會稽頗多、呼為黄金間碧、

笋亭客話云對青竹身黄色、有一脉青、節々相對、故謂之對青也、

皷山志云黄金嵌碧玉竹、生靈源洞、

物理小識云成都黄竹溝青、

秘傳花鏡云金鑲碧嵌竹、産自成都、近日浙杭亦有與常竹無異、但幹上毎節兩青兩黄相間、

福州府志云黄金間碧玉竹、一黄一青、横竪相間、山中多有之、高湖産者絶鉅、

鎮江府志云閃竹即宋景文黄魯直所謂對青竹、宋賛曰、翠溝如畫、黄賦曰金碧其相、今以幹碧溝黄者、為碧玉間黄金、幹黄溝青者、為黄金間碧玉、

南寧府志云青黄竹、通志青黄間碧玉、

紹興府志云對青竹、惟會稽頗多、彼人呼為黄金間碧玉、今或称曰閃竹、又曰間竹、又云越閃竹、宋祁賛翠溝如畫、黄庭堅賦金碧其相、

瓊州府志云青黄竹、笏半青半黄、

廣西通志云青黄竹、俗云青黄間碧玉、

嘉興縣志云黄金間碧玉、逐節青黄相間、亦不易得者、

江陰縣志云、金竹色黄故名、俗云黄金間碧玉、

八閩通志云斑桃枝竹、一曰界金竹、又曰黄金間碧玉竹、

林譜記云閩人呼其笋為黄笋、亦名黄竹、

筍譜云對青竹、一邉青一畔紫、二色相映可愛、筍萠可食、

出成都、近孟昶據蜀作對青竹亭焉、
華陽國志云成都竹有名對青半青半紫、二色相映、可愛、
事物紺珠云對青竹一邊青一畔紫、二色相映、俗呼黄金嵌
碧玉、
曲籍便覧云對青竹半邊青半邊紫、二色相映、可愛、出成
都、
因樹屋書影云成都有竹名對青、半青半紫、二色相映可
愛見華陽國志余在泉州、見此種甚多但細如拇指、絶無
巨者、

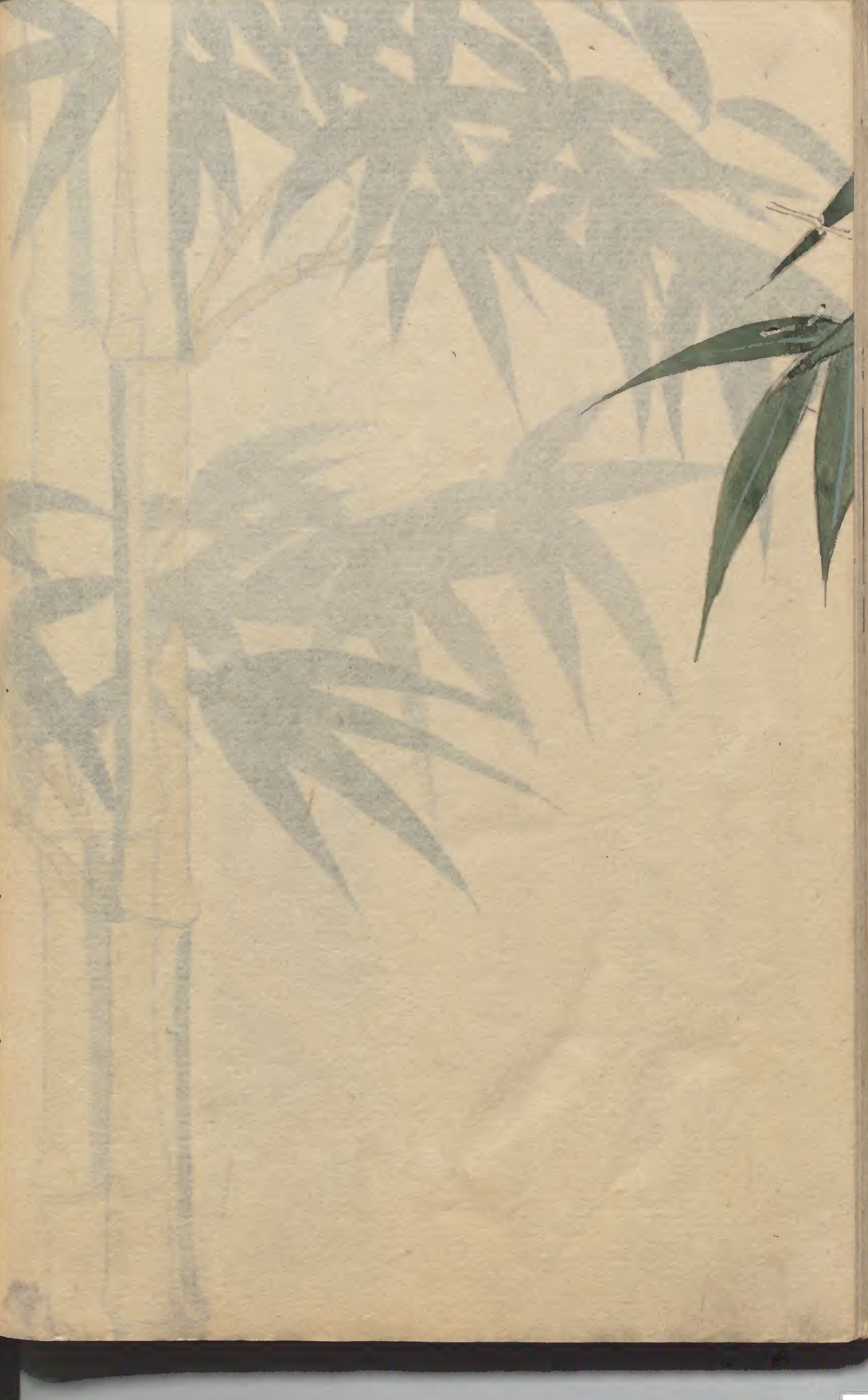
国立公文書館
National Archives of Japan

釋名

金明竹和漢三才圖會庶物類纂○稲若水曰金明竹は武蔵の方言なり金竹庶物類纂本草一家言増補地
錦抄○稲若水曰きんちくハ加賀の方言なり志ほちけ庶物類纂○稲若水曰志ほひよまけは駿河ゟ方言なり
んちく〳〵同上○稲若水曰豊前の方言なり筋竹本草一家言○案るに金竹金明竹ハその色以いひ筋竹ハ節間に青綫道ある
をいやう竹増補地錦抄○案るにやう竹の名諸家本草に所見
ふたいし蓋し種樹家の名なるへし黄金
間碧玉竹竹譜詳録五雜組金鑲碧嵌竹秘傳花鏡黄金間碧本草彙言
竹遵生八牋
○案るに黄金間碧ハ蓋し碧の下に玉字の落しなるへし碧斑桃枝竹ハ閩通志男金竹同上黄竹同上越
閃竹紹興府志閃竹同上間竹同上對青竹成都古今記青黄竹廣西通志
瓊州府志本草彙言
南寧府志

正誤

肇慶府志云碧玉間、莖黄如金、數縷青綠間之、故名碧玉



間黄金文云、黄金間、皮色翠碧、數縷金絲間之故名黄金
間碧玉 案に黄金間碧玉竹ハ竹身黄にして溝青く碧玉間黄金竹ハ竹身青くして溝黄なるハ上文によれハ其の諸書にて考ふし
然るをなりに茎黄にして青絲の間あると碧玉間黄金竹とし皮碧にして金絲の間あると黄金間碧玉竹となすハまた誤れり且數縷
青絲數縷金といふ時ハ恐らくハ金絲竹の類をさすに似たり最疑ふし
増補地錦抄云金竹ゆまき篁竹ともいふ 案に篁竹ハ節にのみある竹の名なれハ此篁字ハ蓋し筋字の誤りなるへし

高麗竹 すぢ竹

高麗竹一名蘇枋(スハウ)竹一名筋(ハチ)竹ハ漢名ハ金絲竹一名白絲竹一名刷絲竹一名七絃竹一名篙竹といふその幹節並に女竹に似て高さ三五尺大さ小指の如し毎節相去こと五寸許にて三枝五枝或ハ七枝ハ叢生すまた大枝よりわかれし小枝に至りてハ双枝なるもあり独枝なるもあり其三枝なるも若竹にして五枝七枝なるハ老竹也されど女竹と同しく年ハ経れども三枝五枝の間に別に二筍を生して其枝ハ増し小枝乃双枝独枝なるもまた二筍三筍ハ生して五枝三枝となるハ本幹と同し葉もまた女竹に似て細小にして四葉五葉七葉等の不同ありといへども其葉茎に二葉三葉の枯落し小篳現に存すれハ全形ハ即七葉一朶なるへし扨此竹若き時ハ通幹艶紅色なること頗る蘇枋ハ以て物ハ染しの如しそれより五六七行ほど青線路ありて究も刷絲の如く老る時ハ其ほか紅色を放つなり淡黄に変して青色まして薄し今種樹家往々これを培養するものあり

其奇麗最愛でたへし往時此竹を薩摩より東都に奉りしことありしされど今ありやなしや蓋し其の遺種なるへしまた呈まもとる撫州より此竹を製し布とせしを貢せしこと竹譜詳録にみえ撲仔籬等社の土番をして此竹を以て箭に作らしむしは臺灣府志にみえたり

大和本草云一種スヂ竹ト云竹アリ女竹ノ類ナリ白キタケ筋アリ大名竹ニ似テ同シカラス 案るに金絲竹の一名を白絲竹といへるもすぢ竹即金絲竹の時ありてそれ色は変せしものなるへし

本草一家言云一種概節似蘆幹有線路青黄紫相雜為縱文名 此の下缺文あり蓋し金絲竹の三字あるべしまたは筋竹の二字にてもあるへきにや

本草觽云金絲竹似大名竹有小筋出竹譜

竹譜詳録云金絲竹生湘潭間一名白絲竹一名刷絲竹本笄竹之類以其易活人多植於盆檻中久々不厗竿上細黄數道如刷絲然故名志書撫州歲貢金絲竹布

八閩通志云金絲竹紋如金絲故名

閩書南產志云金絲竹如絲

續修臺灣府志云金絲竹一名箭竹大如小指出撲仔籬等社土番以為箭

漳州府志云七絃竹色白帶微紅中有青紋大小相間如琴絃狀

臺灣府志引臺海采風圖云七絃竹幹白有青線紋五六七條葉~~與~~□竹同

穉右

高麗竹 種樹家称○此竹もと琉球より薩摩に傳へしか今つゑ
四方よひ傳ゆくしゝまりて此高麗ハ即朝鮮よりに
もい唐より傳をとの類ひゝて何なこのちをそれ 蘱枋竹 同上○蘱
地より来しよよりて名付しかをゆしゝに 枋を色よ
よりて 筋竹 大和本草○案よ筋竹金絲竹 竹譜詳録 八閩通
名つく に金明竹と同名 志閩書南山志 白
絲竹 竹譜詳録 刷絲竹 同上○玉篇云刷拭也 七絃竹 漳州府志 筋竹
續修臺 三蒼云刷掃也 臺灣府志
灣府志

瑇瑁竹

瑇瑁竹は今駿河國藤川の傍なる木島郷よりあり即ま竹より一種斑文ありて最長大なるものを往時或人故ありて駿河國に至りて始めて此竹を見出しこれを上下を截去て長さ八尺餘圍ミ九寸許の物を携来りしを親しく見たるにその幹半體は黄色にして半體ハ節間皆大斑文ありてその状一様ならず或ハ一方よりのびたるもありて晩より生する胡瓜(キウリ)の條ある如くにて最大なるの如く或ハ左右よりのびありて約腹壺の如く或ハ本小末大よりして頗る團扇の状の如きも或ハ大小のびたる者なりしかして多く紫黒色のあるもありてその斑文は下は上も下の方多くて色ありて上のかたもやゝ薄し凡斑

竹ハ皇朝にても西土にても其品偽造のもの多しといへとも
此竹の如きハそのつのり節ことに斑文のこと異なるハ
実に天下の奇竹なりけらし年を経て乾枯せしもの一幹
なる形状のことに何れもおなし生竹及ひ細小なる竹ハ極め
て多しといへとも其斑文の變化百出けれとも異なるものも亦おほく
あることなし或人の其地に至る時土人此幹を擘て箴となし
蛇籠と作りて藤川に於て洪水を遮きりしといへりかくの如き
奇竹を以て尋常なる用に供するものを最おしむへし故に此
瑇瑁竹も舊より駿河國にのみ産して其他諸國になき
選なることなりき故に以て諸家本草絶て此竹を載せす往時或
人其地に至りて携来りしを始めとす故に世人嘗て此種

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

ことを知るものなし　又竹譜筍譜及び本草綱目等にもいまだ此
竹をば載せざれば今迄も西土にもなかりしの如き瑇瑁竹もいつざるべ
し彼にいへる由緒瑇瑁竹ハ弓竹とて毎節斜に曲りて
長さ十餘丈にして斑文有ものなりとそれなれども絶て別種
也備と昭代叢書に載する所の陳定九が竹譜に玳瑁竹産
廣西幹色如玳瑁明亮直透於内といへるハ此竹と全く同種
なるべきにや尚考ふへし

釋名

瑇瑁竹 駿河方言○此竹斑文極めて大なりといへども其状瑇瑁斑に彷彿たり故に名づく　玳瑁竹 陳氏竹譜○玉篇云瑇徒戴切瑇瑁或作玳瑁、莫到切、珪長四寸天子執之又莫對切瑇瑁也、本草綱目云玳瑁、音代昧、又音毒冒、時珍曰、其功解毒、々物之所媢嫉者、故名、

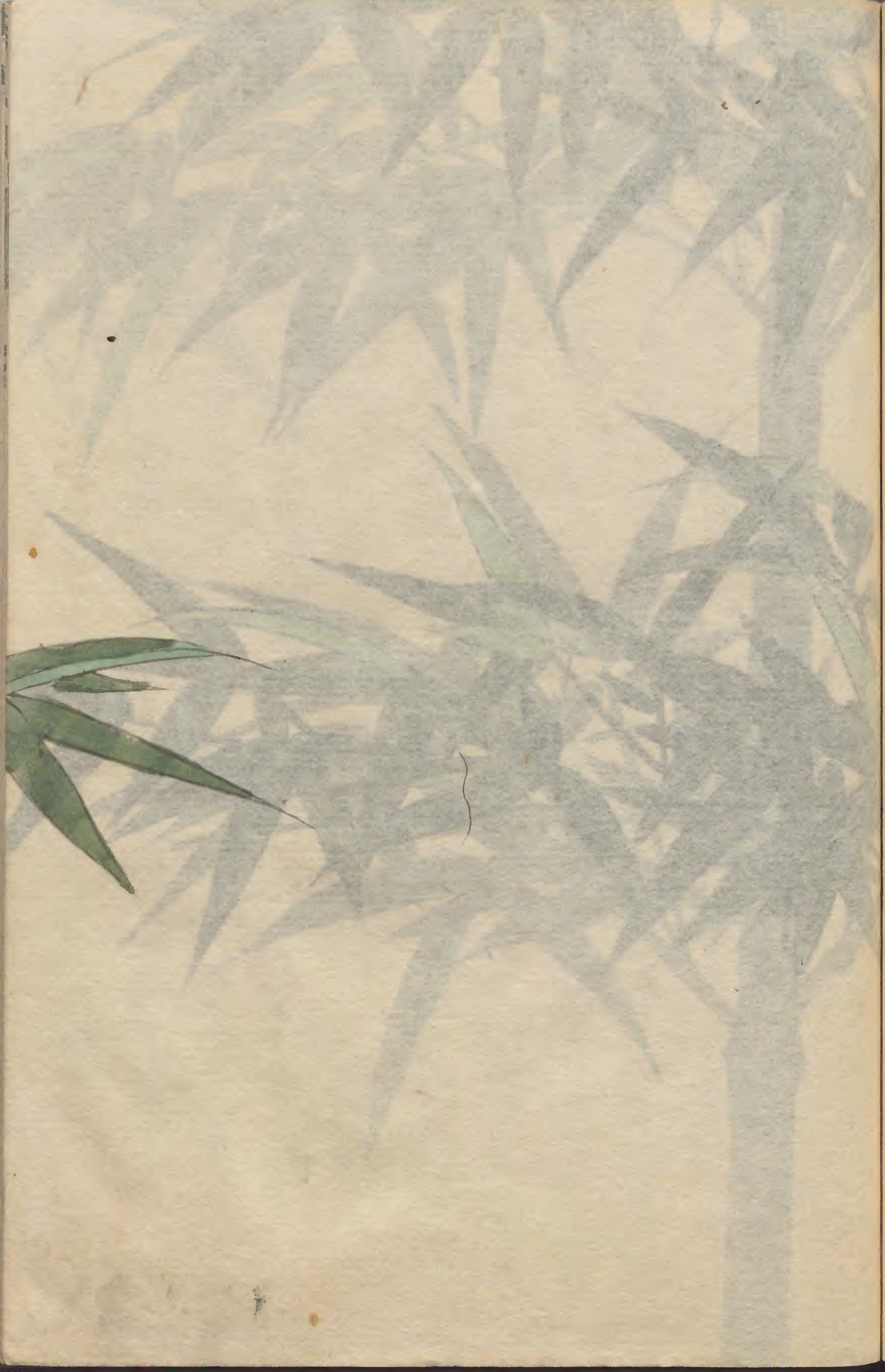
信恵案佐藤成裕之說在總論中今茲冊復載宜削去

漢竹

漢竹は和漢通名なり江村如圭ハ漢竹伊豫に生しよて桶に作るへしと本草鶴ハれ谷川士清ハ漢竹桶とよめりへきをもの豊後よりいつると和訓栞いへりまた相摸の金子村に産するものもなしといへ同種なるへしおもふに此種ハ蓋し淡竹の其土地に應してよく生育し其幹極めて長大にして圍み二尺餘に至るものにて別種にはあらさるへしこれは竹譜詳録に籠葱竹生羅浮山因名羅浮竹々皆十圍といへるも大畧此類なるへしとおもはるゝ籠葱竹ハ恵陽志に葉如芭蕉大長及一丈といひ番禺志に籠葱竹葉大如手徑二三尺といふ時もありしも絶て別種なりと扨佐藤成裕壯年の比遊歷せし時肥後の小國といふ所より二里ほとの山間の人家なき所を過て豊後の肥田といふ処に行しにその間に竹村ありその名も忘れたれとも凡そ其處ハいと高き土山にして其山頭に大竹幾萬幹羣りて生して水田もなく畠のみ少しハありといへとも其畠にも其の比ハそのつくる筍を生して枝となれハ忽に竹藪となるかくし竹の多き処故に土人の家ハ皆竹を以て作れり床ハさらなり柱も障子もみな薪もそれ皆竹を用ゆるなりそこの男女ハ終日竹のことのみかゝらずて別に農業に勤むることもなしとあれも古よりの竹村なれハ三度の飯も竹筍の乾したるを糧とし小児の時より疱瘡も至て軽くして壯健なること世に多くいひなし尤き別に患病も煩ふことなれハ醫に頼む

ことなりしとそれとのゝ土人ハおとろかすに物語しけり又
筍の制衣ならハ柔き比採て湯に浸し或ハ蒸なとして日に乾し
用ゆる時ハ再ひ湯に浸し煮て食するに其味殊によろし凡半里
餘も左右皆竹林にして其道傍に材木の積たるか如く竹を
切て積置或ハ輪竹にして近國へ出す是屋の用に供けれは凡そくの
如く竹の影なかりける所も世にたくひなきことなりけり杖なとの家
内のさまハ皆人この巧にまかせて面白く作なしけるものなれとも
くハ言語にも述かたしといへり和訓栞に漢竹豊後より
出るといへるも蓋し此村のことなるにや
本朝俗諺志云相州西郡の内金子村（さこのてより二里余）に金子市
左衛門といふ百姓あり此藪の竹一尺八寸廻り六七間の末にて

一尺廻り程あり藪をなせし十間又廿間をめくり一間に一本
あり是をうゝしき竹藪なり此竹所望なれハ最初
の契約にて根よりたまはれは三尺なりの上より切て切口に何
か薬をぬり竹の皮にて幾重も包み大切にするなり
廣志云永昌有漢竹圍三尺餘、大者一節受一斛、小者數
升、為椑榼、
筍譜云漢竹筍、大者一節受一斛、小者受數斗、可為樽榼、
其筍一節可受二三升、味雖甘而澀、
竹譜詳錄云漢竹出交趾九眞、廣中亦有之、大者一節受
一斛、小者受數㪷、可為尊榼、其筍一節亦可受二三升、味
甘而澀、



本草綱目云永昌漢竹可為桶斛、斛者、
雲南通志云、漢竹即南中。志所謂節相去一丈、可受一斛
今産不過去二三尺受升合而已、

釋名

漢竹廣志竹譜詳録○案ずるに漢竹名義詳ならず廣羣芳譜引華陽國志云篔竹出永昌郡云云筍譜本草作漢竹疑篔字之訛なりと此誤なるへし されとも今俗に筍譜には漢竹は外に篔筍ありて出温處建寧竹如苦竹長節而薄可作屋椽筍則春生可食と見えたり竹譜詳録本草彙言等にも漢竹篔竹とて各條に出し且二竹は生處を分し異なるよしなれは蓋し一物にはあらさるへし

一種まだけ

一種のまだけも竹譜詳録に載るところ廣西山中のものは
と同種なり予園中嘗て巣鴨の種樹家より移し植

又まれにあり高さ八九尺となり葉尋常のまだけと同じく三四葉或五六葉を以て一朶となれどもその状やゝ細小なるを異なりとすまた新竹の梢葉に至りては九葉或十葉また或ハ十一葉を以て一朶となすものは頗子方竹の嫩苗葉の如し此竹中幹より以上は毎節双枝の間別に小細枝を生してすべて三枝なりといへどもまた節の状及ひ葉本に細褐毛あるハ尋常のまだけに同じ　また白河侯大塚の下邸に猪名野篠原の竹あり即まだけの一種三枝なる又まだけ即子園中のまだけと同種也或ハ尋常のまだけの叢林中にて其幹細小なるものハ多くは三枝簇生してこれを一抱なるものありとすれとも全く變生にして一種の物にあらず

さゝるなり

竹譜詳録云苦竹處々有之廣西山中一種散生每節間生三枝葉長如筀竹色深緑瑩淨婆娑極可人意筍味苦病積熱者食之甚良或云可生長

おきな竹

翁竹一名杢目(モクメ)竹ハ漢名は間道竹といふ其幹節並に苦竹(マダケ)に似て高さ一丈餘圍ミ四五寸に至る此竹始め獨枝にして後に双枝のもの多しされど双枝なるハ必ず左右互に大小の異なることあり又苦竹の如し葉も大抵淡竹葉に似て五葉を一房とすまた三葉のもの四葉のものあり其年を経て二葉或ハ一葉のものハ枯落しまたその全形にまたあれハ其葉表裏

に透りて淡黄白色なる縦道三五行青葉中に間して見篠（チゴザサ）の如し葉末より葉先に至るまで梢葉小至りては却て青色にして縦道なきもあり此即西土にいふところ間道竹なりといへども邦産多く幹水竹の如く毎叢或ハ十四五葉に至らざると異なりとぞ今白河侯大塚の下邸に尖目竹といふものあり即ちこれ也同種なり又一種あり葉大なるして苦竹と一様にして毎青葉のうち多くは左枝に一葉或ハ右枝に一葉あり葉の正中或ハかたよりて一行二行の間道あるもの有これハ全く苦竹の變生なり

増補地錦抄云箭竹は葉の色白く淡し青筋ありて白く底の如く遠く見越てたまたまのむらなを雪ふり竹と見る如くとしるゆ

へて志ほきゆうかきも風なり

竹譜詳録云間道竹生両淅山中、人家庭院、亦有植之者竿如水竹、節差密葉如毛頭竹頗痩長、葉上有淡黄間緑細勤道五七行、毎叢或至十四五葉、呉興周公謹家有別業在杭、一叢數本、

釋名

翁竹 増補地錦抄○名義上文にミえたり 埜目竹 種樹家称○埜目竹ハ本說條理あるをいふ此葉間道木の條理あるか如し故に名けし 間道竹 竹譜詳録

孟宗竹 まうそうちく

孟宗竹一名唐孟竹一名まうそうちくも漢名を狸頭竹一名猫獐竹一名猫兒竹といふこれ高さ二丈餘圍み八九寸ほど

て毎節間はちゞくより短し其節の状上段至て低く下邊く稍高しこれを細査すれども全く下邊のミにて上段なきか如し凡諸竹ハ半體以下そのふ太さ毎節大概同しきれとも孟宗竹ハ極上第一二節よりして第三四節ハ少しく細く第三四節よりもまさく箋五六節もやゝ細し毎節漸くかくの如くして稍上に至る故に下麁にして上細なるハ即此竹の性也そのふ根上より六七節の間ハ節殊に密にしてさしてそ節下ハ粉白けなることはちゞくの如しその大なるものハ即十七ハ節以上よりして枝を生じ小なるものハこれに準へてさしたるいふ迄も始の一節ハ獨枝にして後に双枝なるもありそれ始め一節ハ双枝にして後に獨枝を生しそれより以上ハすべて双枝

なる事もあれど全くはちくの葉に似てはちくより毛
極て繁く毎枝みな三葉にして時に二葉なるも交れり
凡はちくまだけの類の大なるものも節低くして小なるも
て殊に節高しといへとも孟宗竹ハ細大の別なく皆
本幹節ハ毎節低くして枝節も却て鶴膝状をなして尤
ちこの枝節よりも甚高して常竹と異なれは此竹の性
故孟宗竹も舊より皇朝になきものにしてもはや正徳の比
西土の種をもて琉球より傳へしを薩摩に移
植しか今は四方に廣まりしよし 國史草木昆蟲攷に
ミえたりされどそれより以上ハ寒竹及ひ鳳尾竹なとの冬
月筍を生ずる物をもて孟宗竹とハ名付し事も有ん[?]即此竹

の舊よりありし事の確證なり
中山傳信録産物考云孟宗竹和名ワセタケ 桉其幹高
丈餘、甚葉狹小而下垂、甚可愛、穀雨之節出筍、籜皮厚有
毛、
續西遊記云薩隅の邊に唐孟宗竹といふ竹あり人家に多
し常の竹よりも薄く節低く葭に似たり然とも甚だ太く
して大なるものハ二尺廻りも以上に至るッ花生に用ひて甚見事
なり此竹元来唐土より来りしといふよりて薩州にて唐孟
宗といふ也
本草綱目啓蒙云カンチク一名孟宗竹云云今別ニ大竹ニ孟宗竹
ト呼フアリ琉ュ産ナレ氏今ハ京師ニテモ繁殖ス園ニ尺餘ニシテ花尊

ニ作ルヘキ者アリ
國史草木昆蟲攷云孟宗竹正德中ニ中山人これを薩摩ニ致しそれ今に則ち四方ニ盛なり
竹譜詳録云狸頭竹一名猫狸竹、處々有之、江淮之間、生者高一二丈、徑五六寸、衡湘之間者、徑二尺許、其節下極密、上漸稀、枝葉繁細、筍充庖饌絶佳、此筍出時、若近地堅硬、或礙磚石、則無問遠近、但遇可出處、即穿土而出、猶狸首鑽隙無不通透也、故寓此名、亦有高止一丈許者、下半特無枝葉、人家庭院栽植、枝葉扶疎、清陰滿地、殊可愛悅、然竹身下麄上細、竿大葉不宜圖書、廣中出者、筍味不佳、江西及衡湘間人、入冬視其下地縫裂處、堀食之、謂之冬筍、

国立公文書館
National Archives of Japan

甚美、留不取至春亦腐朽、別生春筍為竹、福州人謂為麻頭竹、

續竹譜云、猫兒竹長沙有之、下豐上細、其筍甘美、大者重千餘斤、

漳州府志引華夷考云、猫兒竹大者徑七八寸、高而堅實、筍生冬春之交、

釋名

孟宗竹 中山傳信録産物考本草綱目啓蒙○此竹冬月筍を生するを以て呉の孟宗の古事によりて其の名付しなりされとも孟宗の母に供せしハ竹譜詳録に雪竹筍なりといひ或ハ江南竹笋の早く出るものなりといへりいまこの実をたゞしはまご物産考に孟宗竹和名ワセタケといふ文によれる時は孟宗竹も 唐孟宗竹 續西遊記 わせ竹 中山傳信録産物考蓋し琉球名なるも考へしのらし 狸頭竹 竹譜詳録○名義上文にみえたり 猫彈竹 同上 麻頭竹 同上○福州の方言なりし

いへ猫兒竹續竹譜漳
ま州府志

正誤

本草綱目啓蒙云江南竹和名孟宗竹云　云　案ニ此説ハ八閩
通志ニ江南竹廣大而堅直筍冬生といへる文によりて孟宗竹を充しなるべけれども竹
譜詳録ニ江南竹一面出三枝といへり通雅ニ江南竹葉肥幹薄不可為
篾葉大可裹粽交蓬者也といへは孟宗竹
を江南竹にて充らさるなり

國史草木昆蟲攷云孟宗竹を彙苑詳注ニ貓竹大者徑七
八寸高而堅實筍生於冬曰冬筍不出土而味佳といへるも
誤なり　群芳譜ニ茅竹又作毛竹皆一聲之轉也云　云　案ニ八閩
通志云貓竹方言謂之麻竹、大者徑七八寸、土人或取其葉以裹角黍筍夏
生す、閩書南産志云猫竹方言謂之麻可以椽可以器削之可以刀其
夏月可以裹角黍といへる凡角黍と裹にも孟宗竹の如き細小なる
葉にてはつむへからされは猫竹ハ即孟宗竹にはあらさるへし　餘
姚縣志云毛竹或作猫又作茅、致富全書云毛竹遍身毛刺其本堅厚需用
最多其葉大即青箬取作笠及舟蓋諸用筍冬初即生名潭筍味最鮮

とこえ多りあれによりて毛竹或は猫竹ニ作るものもまゝ孟宗竹にそ
あやまれりとも秘傳花鏡云猫竹一作毛竹、浙閩最多幹大而厚葉細而小
異於他竹、人取編牌作舟、或造屋皆可、常熟縣志云幹巨而葉細者為貓
竹安慶府志云猫竹大而堅厚適用、筍可食竹不生處埋死猫一頭、明年
筍即生故曰猫竹、江南新城縣志云猫竹筍似猫頭故名竹最長大なと
いへるハ孟宗竹に近きやうなれとも廣羣芳譜ニ猫兒竹長沙有之下
豐上細其筍甚甘美、大者圍十餘寸、案毛竹一名猫竹與此各別と
こえたれは猫竹は孟宗竹にてはあたらさるなり

布袋竹　琉球竹

布袋竹一名琉球竹一名虎攅竹是漢名とも多般竹といふ此竹
根上より二三節以上は其節密なること凡五六節或は八九
節其最密なるは十二節に至るもあり節或斜或正にして
毎節擁腫究も人面のごとく或は鶴膝のごとく或は螃螬の
如く或は縮頸の鼈の如しとなりより以上は節疎にて節の状
真竹(マダケ)に似て上高く下低し凡密節上より末に至るまでも其節下

に擁腫なきも此竹の常なれども稀にまた擁腫あるもあり
葉はまたく細竹に似て長大にして繁し されども先二葉相
對し一葉もあれども下に付てなくて三葉を一朶とし始の枝も
されど擁腫を見れ密節上よりして並び生し或も密節中
及び密節下よりも生するものあり又もし見の枝獨枝なるも
あれどもその節に黄芽を含めるもあり その枝なれ生ずる方も
竹身にある凹處あり とらへてもみ其正中少しく高く起りてその
凹處全く兩道なり 此竹高さ八九尺より一丈許に至る郷人
從前此竹を杖とすその質至て輕くして雅趣あり 實に扶
老の材なり 此筍状小なりといへども味ひ衆筍に勝れり
されど人多く採り喫ふことをしらず 又俗に武田竹とよぶ

そはあり古へ武田信玄存生の時手つから杖に截土にさし込
置しか根付しものにて今に其竹を節の所より折れば花菱
の紋あらはるる見ゆるといひ傳ふ 此竹の産する処も甲斐國府
中の傍なる信玄居城の跡なるらし 今白河侯の文塚の下邸
にもあり種を移し植られしを親見せるに全く今の布袋
竹なり別種にはあらじ

大和本草云琉球竹又コサン竹ト云琉球ヨリ来レリ大ナルハ杖鞭
ノ如シ形状其葉ハ呉竹ノ如シ節間或ハ近ク或ハ遠シ近キ者ハ五
六分遠者五六寸一本ノ内ニテ遠近アルヿ如此筑紫ニコレアリ
和漢三才圖會云棠出於日向佐渡原有名虎攢竹者高
五六尺其葉小自根上一尺計間有節七八數礫砢甚奇

也、即節竹良、根稍痩細、性不勁、是所謂暴節竹乎、
本草一家言云、鶴膝竹、其根上十節許、促ニ腫脹、凸起、如
人面、倭名布袋竹、又名古散竹、漢有虎散竹、與之不同、
本草綱目啓蒙云ホテイチクタリ本邦ニテハ杖トス元琉産ナル故
大和本草ニハ琉球竹トイフマタコサンチクトモ云漢名人面竹、草木
彙ト云ヘリ
言
竹譜詳録云、多般竹、亦人面竹之類、去土一二節之上、生
節長斜正不等、或如人面、或如鶴膝、或如鱗甲、或如蠐螬、
或如縮頸之鼈、或如蔵六之龜、五六寸節後方如常竹、故
名、東陽金華山中尤多、

国立公文書館
National Archives of Japan

竹譜詳録所載多般竹之圖

釋名

布袋竹 本草一家言 本草綱目啓蒙○此竹節間圓起突出頗る畫にゑがける布袋和尚の画のごとくまことに腹の如くなるゆゑ名つく よりて 琉球竹 大和本草○此竹もと琉球より来る ゆゑにこの名あり 虎攅竹 和漢三才圖會 大和本草 本草綱目啓蒙○案るに三才圖會に虎攅竹ハ俗称なりとしるし 本草一家言に古散竹に作る 廣大和本草も其名義に至りてもいはず○五三竹に作る此竹の節或ハ三或ハ五相連きるによりての名なるは又古散竹とあれども別物なれバそれぞ音通にてその名を假借せしのミなり又或ハコサンも鼓山にて閩中の地名なるよしもあれども疑ハし

多般竹 竹譜詳録○此竹毎節極めて多般故に名つく

正誤

和漢三才圖會云虎攅竹、是暴節竹乎、案るに暴節竹ハ俗にいふ小竹といふ即節竹にして皇朝にこのそなきもの也

本草一家言云、鶴膝竹、一名佛面竹、一名雞腿竹、倭名布袋竹、案るに鶴膝竹と佛面竹とハそれぞれ両種にてまた布袋竹とも異なり然るを今三種混同して一つとなす、そのも誤れり又雞腿

竹の名は廣群芳譜にみえたりされども
鶴膝竹の一名にして布袋竹かもしれずして
本草綱目啓蒙云ホテイ竹は漢名人面竹ト本草彙言云へり案ずるに人面竹は通雅によるに佛面竹の小なるものなれば布袋竹とも別種なり其状布袋竹は毎節擁腫なること人面の如く或は鶴膝の如くにして人面竹は両節の間突起なること人面の如くにして仏面の如きものあれそれよりは一種にはあらずなり

佛面竹 佛肚竹

佛面竹は和漢通名にて一名を人面竹一名を鬼面竹一名を佛肚竹一名を佛眼竹といふ俗名を拉(ラ)毋(ム)七(チ)狐(く)といふ下野國芳橋邊の竹林 丹洲圖竹 及び伊豫國吉田領大乘寺境内にありと 國史艸木昆蟲攷 いへり其状大小のたぐひありといへども凡て地上一二節或は三四節より左右非正両節相對して大亀甲文の如く中間高く起りて頗る人面のごとくまた佛肚の如し方于魯が墨譜に毎節間二句一聯の七佛偈を鐫成せしは即此竹にて西土にも至て稀なりと 丹洲圖竹 いへり今案ずるに此種西土にも大小のものありてそれ大なるもならばち華嚴寺の什物にせしと丹洲圖竹に載しのにてその産地はまた詳ならずといへども竹譜詳録に天竺國に産せるものゝ形似て尤奇とみえたるを思へもし此天竺より傳来せし物にもあるべきにやまた小なるものも両浙江廣にいたると 竹譜詳録 いひまた高要縣にも所在多くなりといへり 高要縣志 いへり此種は尋常の人面竹にして方氏墨譜にいふ所謂仏面竹にはあらずぬれと一物なる事

丹洲圖竹云佛面竹大サ長サ圖ノ如シ古色光澤愛スヘシ正面

ヨリコレヲ見レハ大亀ノ甲紋ニ似タリコヽニ圖スルハ側面ヨリ一看
セル所也方氏墨譜ニ佛面竹アリ其状此圖ト一般ナリ大サ一握
許ニシテ節間盡ク二句一聯ノ七佛偈ヲ書シテ鐫成セルモノナリ
唐山ニモ稀ニシテ得ヘカラサルモノトシテ貴重ストミヘタリ本邦下野州
茅橋ト云所ノ竹林ニ此状ノ竹アレトモ小ニシテ見ルニ耐スト云
國史州木昆蟲攷云方于魯墨譜及ひ李息齋竹譜に圖
載せし佛面竹ハ奇乃奇なるものなりあれ蓋竹譜の人
面竹の属なり伊豫國吉田領大乘寺境内に生するとて其
國人より圖をとりたりして予に質せり即佛面竹也
通雅云華嚴寺佛面竹作筒、即人面竹之大者、僧侈其名
遂信之邪、

竹譜詳録云人面竹又名鬼面竹、又名佛面竹、兩浙江廣
倶有之、去地上一二節、皆左右邪正兩節相對、中間突起、
長圓宛然如人面、或多至十數節之上、始平正如常竹、筍
亦可食、人多採以為柱杖、福建人呼為佛眼竹、東坡送與
羅浮長老者即此竹也、或云天笠所産者形似尤奇、
肇慶府志云佛肚竹出陽江封川、俗人面竹、節小而中大、
堪作杖、
天台山方外志云佛面竹北山間有佳者、可作杖、不堪他
用、故植之者寡、
廣東新語云人面竹節小而中大、小處如人面、大處如腹、
亦曰佛肚竹、

高要縣志云佛肚竹今所在多有之俗呼人面竹、節小竿中大差堪作杖

桂海虞衡志云人面竹節密而凸、究如人面、人采之為拄杖、

五雜組云有人面竹、其節紋一覆一仰、如畫人面然、

農政全書云人面竹出剡山節極促四面参差竹皮如魚、鱗面凸頗如人面、

海澄縣志云人面竹萃夷考云節密而凸、究如人面、故名、

淳祐志名佛眼竹、

諸羅縣志云人面竹高四五寸、通志一名佛眼竹、可供玩賞、

紹興府志云人面竹剡山有之竹徑幾寸近本逮二尺節極促四面参差竹皮如魚鱗而凸、頗類人面、

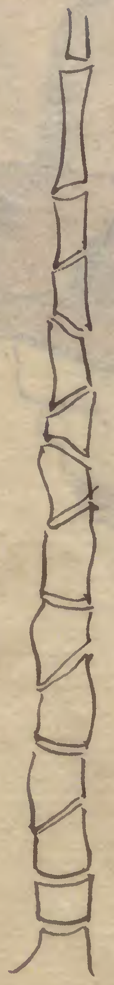
八閩通志云人面竹其幹與常竹無異、惟兩節間、突起如人面、可以為杖、

又云人面竹亦曰佛眼竹、

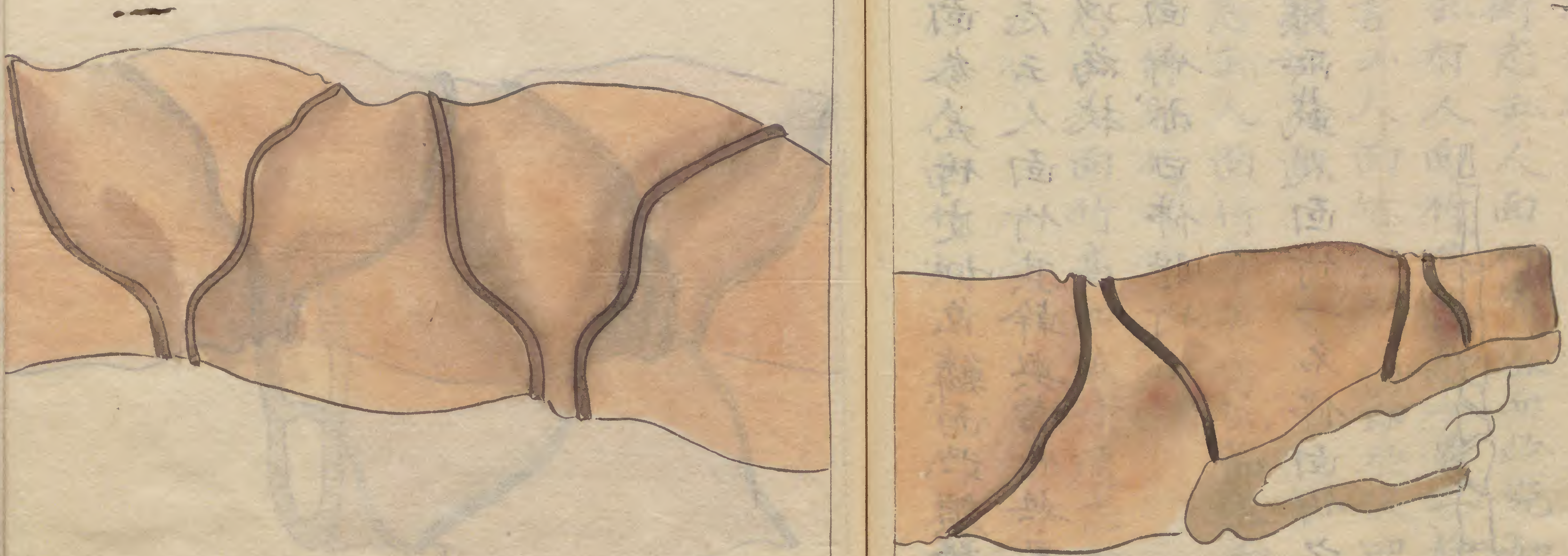
案是圖据例当在丹洲圖之後

竹譜詳録所載人面竹一名佛面竹之圖

一



丹洲圖竹所載佛面竹之圖



方氏墨譜所載佛面竹之圖

釋名

佛面竹 通雅竹譜詳録方氏墨譜 人面竹 竹譜詳録本草彙言廣東新語肇慶府志○宋長石飲食書云人面竹節作亀文遠視似眉目 鬼面竹 竹譜詳録 佛肚竹 廣東新語肇慶府志 佛眼竹 閩通志海澄縣志○案するに上五名ともに譬喩にして何れのものも眼目口鼻の状を具せしにもあらず されどもうけていはゆるといふ時は大なるものを仏面竹或ハ仏肚竹といひ小なるものを人面竹或ハ仏眼竹といふ又或は仏眼竹も蓋し節間にすこしく凹凸ありて頗る眼目の状あるによりて名つけしにて何れも原さきにや

拉母七孤 廣物類纂○近江州及ヒ和泉州の方言なりといへり

桂園竹譜卷之三終

内閣文庫

六十一枚

国立公文書館
National Archives of Japan

農商務省
圖書
第八一六號
共五冊

国立公文書館
National Archives of Japan